

清水博士  
追悼記念  
明代史論叢

田村実造

本論叢は編者（酒井忠夫・中山八郎・星斌夫・山根幸夫）が序文にもいっているように、これまでのおおくの記念論文集とおもむきを異にして、出身大学のいかにを問わず全国の明代史研究者、それも現在わが東洋史学界の第一線に活躍しつつある青壯学者たちが、その先達としての故清水泰次博士に献呈した追憶記念の論文集である。所収の論文は二十一篇をかぞえ、巻頭に栗原朋信教授の「清水博士小伝」を、また巻末には山根幸夫教授の「明代社会経済史研究文献目録」をそえる。二十一篇の論文を。その内容によっていさう類別すると

1、政治史に関するもの 中山八郎——再び嘉靖朝の大札問題の発端——に就いて。野口鉄郎——明代北辺の白蓮教とその活動。片山誠二郎——月港「二十四将」の反乱。

2、社会・経済・制度一般に関するもの 栗林宣夫——一条

鞭法の形成について。片岡芝子——華北の土地所有と一条鞭法。谷光隆——明代の積餉銀について。山根幸夫——明代華北における役法の特質。寺田隆信——明代における辺餉問題の側面。佐久間重

男——明代景德鎮窯業の一考察。藤井宏——「占窩」の意義及び起原。酒井忠夫——明代前・中期の保甲制について。星斌夫——明代海運の推移。五十嵐正一——明代における儒学教官の考課について。江島寿雄——明末女直の朝貢に就いて。三田村泰助——初期満州八旗の成立過程について。

3、史料の紹介・解説に関するもの 石原道博——皇明祖訓の成立。岩見宏——「山東経会録」について。佐伯有一——明末織工暴動史料類輯。田中正俊——鄧茂七の乱の所伝について。

4、思想史に関するもの 間野潜龍——林兆恩とその著作について。鈴木正——明代山人考。

となる。いずれおとらぬ力作ぞろいであるため、これらのすべてを、ここでいちいち紹介することは紙幅の都合からも、とうていゆるされそうもないので、恣意的ではあるが、その若干のものについて申しのべることにしたい。

まず政治史に関するものから、とりあげてみると、中山八郎——再び「嘉靖朝の大札問題の発端」に就いて 再びとことわってあるのは、かつて大阪市大、『人文研究』八の9にのせた問題の続編といういみで、著者が再度この大札問題をとりあげた意図は、これまでのような政治的立場からだけでなく、儀礼派（世宗を擁する一派）と反儀礼派（楊廷和派）の対立も、世宗（嘉靖帝）の幼時からの教養や孝道に対する考え方のちがいがその根底にあるとみるからである。すなわち著者は大札問題を世宗を軸心として考察し、世宗は大札問題を通じて生父母の孝道——それは庶出の生父を嫡出化することであったが、——をつらぬき、その成功が世宗の独裁専制権を強化さ

せることになったという。しかし、もうすこしたち入れれば、世宗の孝道も、傍系からむかえられた世宗自身の皇位継承を、生父を嫡出化することによって一〇〇パーセントに正当化しようというところが、その究極にあったのではないかと考えられよう。ついで著者は、反儀礼派と儀礼派ならびに世宗の三者と王陽明との関係について考察をくわえたのち、最後に内藤湖南博士の示唆にみちびかれて、反儀礼派が大札問題を機に明代の掌故や先朝の古例を調査研究するようになり、やがてそれが清朝孝証学の先鞭をなすにいたったことを指摘しているのは傾聴すべきであらう。明末の大札問題も、このような角度からとりあげてみれば、まことに興味ふかいものがある。

野口鉄郎・片山誠二郎両氏の論文は社会・政治史ともみられるが、前者「明代北辺の白蓮教とその活動」は嘉・隆時代の明蒙交渉において、北辺の白蓮教徒が演じた歴史的やくわりについて考察したものである。著者は、明末北辺の防衛軍士および辺民らの生活上の困窮が、かれらに反官的思想をうえつけ、その素地のうえに白蓮教のような秘密結社が培養されたことを指摘し、かれらがさらにアルタイン・カーンらのモンゴル指導者とむすびついた事情をあきらかにしている。このような観点から、白蓮教とはいちおう関係がないかも知れないが、明末に李自成・張献忠らが西北辺の陝西地区を舞台に蜂起するにいたった事情をも追究すれば、さらにもしろうい問題が展開するようにもわれる。後者の「月港二十四将の反乱」は、嘉靖四十年（一五六二）正月福建の月港におこった「二十四将」の名でよばれる貿易商人団の反乱過程の分析と、月港における密貿易の経営構造とを通じて、自立的な貿易商人層がはたした歴史的やくわ

りについて考察している。

つぎに社会・経済・制度一般に関するものは、本論叢中、過半数の十二篇をかぞえる。そのうち栗林、片岡、山根三氏のものは、一条鞭法に関する研究である。栗林宣夫——一条鞭法の形成について 一条鞭法がどのような過程をへて、実質的には、いつごろから施行されるにいたったかを考察したのが本篇である。著者は、条鞭は一举に創造されたものではなく、明代中期ごろからはじまる各種の賦役改革の積みかさねをへて形成されたものであるという立場から、それらの改革案を(1)諸項目の合併統合、(2)銀納雇役化の二対策に大別し、この二対策が実現されてゆく過程こそ条鞭の形成過程であるという。このため条鞭的役法の成熟を、諸種の史料から嘉靖末年ごろと考定し、またその基盤となった地域としては江西・湖江、とくに餘姚・平潮・常州などをあげ、ついで名実具備した条鞭法（条鞭法の完成）の施行を、隆慶元年（一五六七）の浙江餘姚県におけるものと推断する。

片岡芝子——華北の土地所有と一条鞭法 これは明代の山東を中心とする華北の土地所有関係の歴史的現実をふまえて、条鞭法を考察したものである。山根幸夫——明代華北における役法の特徴 本篇は華北と江南における経済的差違が、社会的・政治的・文化的差違をも生じたであろうという前提にたって、明代の賦役制度、とくに役法にみえる華北の特殊性を考察している。著者は華北における役法の一特色として徭役科派の基準に門戸の上下（資産の多少による門均徭・門銀）が重視されたことをあげ、この門銀の科派は明代中葉の弘治・正徳の交に確立し、以後華北では門銀と

丁銀（丁の多少による丁均徭）とが、ほぼ相なかばする比重をもつて行なわれたという。ところが、明末に華北の各州県に一条鞭法が適用されるにおよんで、門銀・丁銀による二本建て役法は大きな変化をうけ、地銀が門銀にとつかわることになった。著者によれば、華北における条鞭の施行は、門銀が廃止されて地銀がこれに代ったことにはかならないといひ、最後に門銀の存在をもつて租庸調制のこんせきとし、これを華北の後進性の一証とみて、このような門を対象とする賦課法を、明朝にさきだつ金・元の時代に求めようとする模索する。著者のこの推測には筆者も同感であり、もし憶測がゆるされるならば、それは金代の物力錢に系統をひくものではあるまいか。なお本篇の引用史料が、すべて書きおろし文に訳されていることは好ましい傾向である。さらに欲をいえば、困難ではあるが口語文であればいっそうよみやすいであらう。

一条鞭法に関しては、いま一篇岩見宏——「山本経会録」について、がある。これは頭初分類では史料解説の部におさめておいたが、ここで一連のべておこう。山本経会録という書冊は、内藤湖南博士旧蔵にかかる明代税役制度に関する史料である。岩見学士は本書の内容に関して、その各因革や附録の条にみえる一条鞭法関係の記事を中心に具体的な紹介を試みたのち、名称に関するかぎりでは、山東においては嘉靖二十年以来一条鞭法が施行されたことを指摘し、清水博士、藤井宏教授らの見解を支持する。なお著者は、本書冊を嘉靖時代以後各地において作成されはじめた賦役冊の一であると推定する。いずれにしても、これは明代の財政賦役史の研究には根本的資料といつてよく、それだけに本篇には一二葉の写真がそ

えられることがのぞましかった。

谷光隆——明代の樁朋銀について

著者はかねて明代の馬政に関する研究に専念しているが、樁朋銀も馬政に関連するもので、樁朋銀とは樁頭銀（樁銀）・朋合銀（朋銀）の併称である。がんらい明朝はモンゴル族防衛上国初から馬政を重視したが、成化時代から馬匹の倒失がひどくなったため、その対策として樁朋銀・地畝銀・変売銀など各種の名目による馬匹買補の資金を設定した。本文文はそのうちで、もつとも基本的意義をもつと考えられる樁朋銀について、その歴史的考察を加えたものである。著者は、樁朋銀が時代の経過につれて、いたずらに將領たちの侵漁の対象となるにいたつた経過をたどりつつ、それが正徳ごろから、ついに馬匹買補資金としての主体的地位を太僕銀（太僕寺馬餉銀）にとつかわれたことを究明したのち、終章においては北辺馬市の市本を構成する要素としての樁朋銀について論述する。北辺馬市についても、このような立場から追求してゆけば、今度さらに問題を展開するであらう。

寺田隆信——明代における辺餉問題の側面

明朝一代を通じて北辺防衛の経済的基盤となった辺餉問題は、時代とともに重大化していったが、その辺餉を構成した要素としては屯田糧・民運糧・開中法・京運年例銀の四種があげられる。本論文は、そのうちの京運年例銀を通じて辺餉問題を究明しようとしたものであるが、さしあたつては京運年例銀の意義、その解辺開始の時期および数量の問題などにかぎっている。これは著者も自認しているように辺餉問題の基礎的・前提的試みであつて、さらに北辺の屯田制、民運糧の銀納化・開中法における運司納銀制の成立などとの相関関係において

考究されなければならない問題でもあるから、今後における研究の進展を期待したい。なお本論文は、同じ著者の「民運糧と屯田糧」

『東洋史研究』二二巻二号」ともあわせよむ必要がある。

佐久間重男——明代景德鎮窯業の一考察

明代景德鎮におけ

る窯業を中心に、窯戸が匠役制のなかで国家的権力によって、どのように支配されていたか、また官窯の匠役制崩壊過程を通じ、民窯は官窯から委託焼造制をへて、どのように発展したか、さらにこれと並行して、窯戸の匠役制が雇役制から召募制へとかわっていったことを考察している。おもに本論文は、窯業という手工業的な面を通じて、明清時代の社会構造や生産関係およびその発展過程の一斑をうかがったものであって、数すくない研究として注目に値する。今後さらに明末以後における民窯をめぐる諸問題についての考察をのぞみたい。

藤井宏——「占窩」の意義及び起原

これはかつて、中山八

郎教授によって提起された明代中期以降の勢要による占窩の問題「開中法と占窩」に再検討をくわえたものである。著者はまず窩の定義と占窩との関係を考えることによって、初期の占窩の実態をあきらかにしようとしている。そのために窩に「空」の定義があることに着目し、開中法の手続きのなかにあらわれる「虚名」「空名」の事実を媒介にして、占窩とは「虚名を占める」「空名を占する」ことにもとづくものではないかと類推し、さらにそのうらづけを、明実録その他の史料に求めて具体的に証明する。著者の論証の精到さと巧妙さに敬意を表したい。ただし著者みずからも認めるように本問題にはなお万曆中期以後両淮塩場を中心に成立した窩または占

窩の歴史的解釈、およびその占窩と、ここにとりあげている占窩との関連など未解決の問題がのこされている。

酒井忠夫——明代前中期の保甲制について

明代の村落自治組

織といえ、一般に里甲制一式であったかのように考えられがちであるが、この著者によれば、宋元時代以来の保甲制は、その機能（治安的やくわり）を里甲制のなか（里甲および里老人）にとどめつつ、中期以降は、保甲の名称もしいに表面化するようになったという。本篇は明代に里甲組織が保甲制へと傾斜してゆく過程を考察したもので、著者はこれについての史料上の初見を、正統のころ御史柳華が福建で組織した自警団（総・小甲制）にありとする。すなわち保甲制へのつながりを、総・小甲制からさらに正統時代王陽明の十家牌法へまとめ、里甲制→総・小甲制→十家牌法→保甲制というように、里甲制から王陽明の十家牌法による保甲制確立までの沿革をあきらかにしている。

第3類は史料の解説・紹介に関するものとしてくくったが、四篇とも単なる史料の解説ではなく、そのものの歴史的・社会的成立の意義とか、あるいは内容の分析・整理による歴史的評価をおこなったものである。

第4類は思想史に関するものである。間野潜龍——林兆恩とその著作について

これは著者の先著「明代における三教思想」の補訂のいみをふくめて、蓬左文庫收藏の林子年譜序を主に、林子全集その他によって林兆恩の生涯およびその社会思想家としての活動（講学の範囲・著作の種類など）について考察したものである。

以上紹介したもののほか、冒頭に類別したように、なお八篇の

論文があり、いずれも苦心の力作であるが、かぎられた紙幅では、遺憾ながらそのいちいちをとりあげえなかった。

本論叢を通じて気づくのは、銀に関連をもつ論文が八篇もかぞえられることである。各著者はみな自由な立場から、それぞれの研究題目をとりあげているにもかかわらず、銀関係のものが、このようにたかい比率を占めるのは、明代の社会・経済・制度をはじめ万般が、いずれかの場において銀とむすびついていることを語るものといえるであろう。

巻末に附録されている山根幸夫編・明代社会経済史研究文献目録は、わが国と中国とにおいて発表された論著を網羅しており、明代史の研究者はもとより、ひろく東洋史・日本史の研究者にとっても、ありがたく重宝なもので、この点でも本論叢はおおきな特色をもっているといえよう。

(A5判 本文七三六頁 英訳文二八頁 図版一 昭和三十七年六月 大安書店刊 定価二、八〇〇円) (京都大学教授)